

# 史跡探訪レポート

## 市内―亀川地区

本年度は研修部の企画により亀川地区史跡探訪が、亀カメ倶楽部後援の下、八月二十二日（土）に行われました。当初は八月九日（日）で計画していましたが、悪天候のため延期されました。

当日は天気にも恵まれ、懸案の市内史跡探訪、亀川地区が無事終了しました。会員及び亀カメ倶楽部約三十人が参加しての行動でした。コースは浜田温泉資料館（全員で記念写真撮影）、西念寺で御院家から説明を受け、本堂の見学、次いで太陽の家の歴史資料館を見学、白亀塚、亀陽泉、西光寺（法要中）の輪堂、筋湯、そしてカラツ屋にてお接待後、解散しました。

その時のレジュメを次に記しますので、参加できなかった方々も雰囲気を感じていただきたいと思います。なお、レジュメは矢島嗣久理事さんの提供です。

平成二年度、別府史談会、市内史跡探訪、亀川地区

日 時 平成二二年（二〇〇九年）八月二三日（土）

九・三〇～一二・〇〇

集合場所 浜田温泉前、亀川浜田町三

主 催 別府史談会

後 援 亀川亀カメ倶楽部

参加費用 一人七〇〇円、お接待付き

天 候 小雨決行

雨具、帽子、飲み物は持参

### 見学予定場所及び参考資料

① 亀川温泉 浜田温泉資料館 亀川浜田町四、明治三〇年頃の発見。昭和一〇年（一九三五年）に建設。木造平屋建て、入母屋造り、銅板葺きで、望楼状の宝形屋根を載せ、東面と西面に千鳥破風を飾り、正面玄関を唐破風（からはぶ）造りとする。堂々たる寺院造りは、竹瓦温泉（昭和一三年（二〇〇一年）建築）と並び称された温泉建築。老朽化のため平成一六年（二〇〇四年）三月に解体されたが、別府市在住の個人の篤志家から、再建費用として六、五〇〇万円が市に寄付されたお陰で、平成一七年一月から復元工事が行われ同七月に

完成、同九月に浜田温泉資料館としてオープンした。平成一八年八月には、国の登録有形文化財に登録されている。

② 亀川浜田温泉 亀川浜田町五、入浴料金一〇〇円、入浴時間六・三〇～二二・〇〇。

塩化物泉。浴槽温度四二～四五度。無色透明。平成一四年（二〇〇二年）四月、温泉の前に新たに鉄筋コンクリート和風造り平屋建ての温泉がオープンした。浜田温泉の発見は、おそらく明治三〇年（一八九七年）ごろのことであろう。

③ 西念寺 内竈。浄土真宗本願寺派。本尊は阿弥陀如来立像。文亀（ぶんぎ）元年（一五〇一年）、正念（しょうねん）によって開基された。山門は寛政八年（一七九六年）京都の宮大工といわれる椿連雀（つばきれんじゃく）の建築である。また本堂は、寛政一〇年に建てられたという。明治二〇年の御越村社寺調査帳によると、経堂に安置する阿弥陀堂は竈門八幡の阿弥陀堂にあったもので明治初年の神仏分離令により、同寺に移されたといわれる秀品である。本堂には、

本尊のほか阿弥陀仏像及び、顔面を補修した立像がある。④ 白亀（はくき）塚 亀川中央町一二、亀の甲広場のこのあたりは入り江だったらしい。亀の甲形をした池に、現在、亀はいないようだが、池のほとり、鳥居の下に石の亀がい



る。仁明天皇（八三三〜八五〇、平安時代初期）の時代に、この地で捕れた白亀を朝廷に献上したとされ、「亀川」の地名もそこから来ているそうである。

⑤亀陽泉 亀川千人風呂ともいう。亀川中央町一〇―二七、塩化物泉。入浴料金一〇〇円。入浴時間 六・三〇〜二一・三〇。浴室内はかなり広く、浴槽も大きい。湯の温度は熱い。古くから開かれた浴場。明治二七年（一八九四年）に高橋重基（しげもと）が開発したという。明治二七年（一九〇四年）の記録がある。

⑥高橋敬一 幼名広太郎。通称萬之進。号亀陽。天保七年（一八三六年）七月一三日、亀川村里正（庄屋）を代々つとめた高橋家の当主、高橋重政（しげまさ）の長男として生まれる。嘉永三年（一八五〇年）、一五歳で帆足万里の塾に入門。文久元年（一八六一年）、父重政から家督を相続、亀川村庄屋は、このごろ平田村、北鉄輪村庄屋も兼務。慶応二年（一八六六年）、このころ天瀬（日田）生まれで咸宜園出の長三州は、長州藩の奇兵隊とのつながりが深く、各地で勤王家を募り歩くうち、西国郡代窪田治右衛門から指名手配され、潜伏先を転々としていた。大分光吉の首藤周三から身柄をこっそり引き継いだ高橋敬一は、どう

にか長三州を長州勢力下の三田尻（防府）まで送り届け たものの、その年一〇月、首藤周三に続いて捕らえられ、日田陣屋に送られて、くり返し拷問の責めにあったが、答えは変わらなかつたという。慶応三年（一八六七年）八月、日田の幕府領は熊本藩が仮管轄することになったため、郡代属吏と熊本藩奉行が立ち会いで糾問の上、高松役所（大分）に幽閉と決まつた。ところが、明治元年（一八六八年）、鳥羽伏見の戦いののち、日田属吏は窪田以下皆逃亡したので、熊本藩奉行は二人を放免した。亀川村里正は、高橋敬一の留守中、古市里正の高橋新二が兼任していたが、復元された。明治元年（一八六八年）十一月、高橋敬一は、日田県に登用され、調べ役を命ぜられた。勤務は別府支庁詰。中央政府において高官となった長三州の推挙によるものであった。明治二年（一八六九年）二月二〇日、別府詰役人の矢野八郎が日田県令松方正義からの命令を伝えた。松方が三月六日、上京するので、高橋敬一に随行せよとの指名であった。

同年八月、帰任すると、日田県大属に拔擢された。その上官にあたる大参事の白浜勘兵衛が、高橋敬一の才覚を認め、将来を嘱望しての登用であった。その期待にこたえ、

種々の建白書造りなどで活躍した。明治三年(一八七〇年)

一月一九日、一七日から奥五馬(いつま)筋での日田県兵と農民の衝突が大きな騒動となり、竹槍を手にした暴徒が新雑税徴収の改善減免などを求め一揆、首謀者を捕らえ沈静化、しかし暴徒は翌一九日、日田町内に押しかけ、官員兼任の庄屋宅などを打ちこわした。官員、藩兵が鎮撫に迎かい、帰途についたとき、大山(日田)で高橋大属は竹槍で深手を負い、他に数名が負傷、翌二〇日、近くの上手村に移されたが落命。同年一月二二日夜、別府では、花棚道にタイマツ数十丁の行列が見えるというので何事かと疑ったが、それは高橋大属の遺体を搬送してきた一行の灯りであった。資料提供、手嶋宏治理事。

⑦高橋敬一の墓 墓は亀川の山手側。高橋敬一氏は亀川の庄屋の出身。

亀川、平田、北鉄輪の里正(庄屋)。帆足万里に学び、幕政を批判し改革を力説。「長三州」をかくまい、逃がしたかどで日田郡代に捕らえられる。維新後に「日田県大属」に抜擢された人物。明治三年(一八七〇年)一月、日田県一揆の時、暴挙に襲われ一命を落とす。享年三五歳。大正四年に従五位を贈られた人物。

⑧浮亀(ふき)城、亀陽泉の山手側 明暦二年(一六五六年)頃、

大給(おおぎゅう、本姓)松平忠昭(ただてる)の一時宿泊所、信行寺に宿泊したという説もある。のち府内(大分市)初代藩主、二万二、〇〇〇石を与えられて、大分郡高松(現大分市、J R たかじょう駅から北側付近)から入部し、子孫が幕末までつづいた。丹波亀山(京都府亀岡市)から速見郡亀川に転じ、さらに中津留(大分市、今津留のOBSの東側付近)から高松に移って府内(府内城)に入ったものである。別府市亀川、亀陽泉の西、山手側。

⑨西光寺、輪堂 亀川中央町五―四三、浄土真宗、西本願寺派、本尊は阿弥陀如来立像。高橋系図によると、禅宗天龍寺派であったが、右大臣清原真人(まひと)の二七世高橋重元(しげもと)が庄屋職を譲り、寛永四年(一六二七年)剃髪して僧名を空源と称し開基した。

本堂には本尊のほか、無銘ではあるがすぐれた阿弥陀如来立像が安置され、前庭には宝暦六年(一七五六年)に建てられた別府地方で唯一の輪藏のついた経堂がある。

⑩信行寺 亀川四の湯町二三―二、浄土宗。本尊は阿弥陀如来立像。清和天皇二一代の子孫といわれる小島孫太郎太夫親重(ちかしげ)が玖珠郡戸端村の民家で当寺の本尊を掘

り出し、文禄三年（一五九四年）深替（しんよ）和尚が開基したと由緒書（ゆいしょ）にある。同寺にて、日本で初めて明鑿製造を行ったという渡辺五郎右衛門が、晩年、剃髪した。また、五郎右衛門の位牌もある。道をへだてて西光寺があり、昔からこの付近を寺町という。本堂は、近年改築されて、近代的な姿となった。

⑪四の湯温泉 亀川四の湯町二〇―四、単純泉、入浴料金一〇〇円、七：〇〇～二二：〇〇、

楕円形の浴槽で、熱めと温めがあり、入りやすい湯温である。無色透明、少し塩気があり、やんわりとした浴感はよい。一名金の湯・平田温泉・第四湯ともいわれた。市有区営の浴場。古くから開発された浴場で、享和三年（一八〇一年）の記録がある。明治四〇年（一九〇七年）代は四の湯温泉の全盛期であったという。

⑫円通山観音寺 亀川四の湯町二区、（平田）禅宗黄檗（おうぼく）宗。本尊は聖（しょう）観世音菩薩立像。縁起によると、養老四年（七二〇年）仁聞（にんもん）が本尊を刻み寺をつくり相宗寺（そうしゅうじ）と号したという。以後数百年の間に無住荒地となったが、永享八年（二四三六年）豊後国守護職（しゅごしき）であった大友持直（もちな

お、大友氏十二代）が寺院を再建して、円通山観音寺と称した。寺勢も再び盛んとなったが、慶長五年（一六〇〇年）の石垣原の戦いによる兵火で焼失された。のち江戸時代の寛文二年（一六六二年）、小倉城主（現北九州市）小笠原氏により堂宇が建てられた。しかしながら、嘉永五年（一八五二年）失火により焼失した。明治九年（一八七六年）今の本堂が再建された。本尊の聖（しょう）観世音菩薩立像は秘仏で三三三ごとの御開帳という。また、大友持直の位牌とその墓といわれる苔（こけ）むした五輪塔があり、持直の菩提寺といわれた名残をとどめている。山門には、隠元（いんげん、即非の師）筆蹟の山号「圓通山」の扁額がかかげられており、本堂には即非の筆跡で寺号「観音寺」の扁額がかげられている。即非の墓は、小倉・長崎・観音寺の三か所にあるという。

⑬からつや 亀川中央町三一―八、お接待の予定。元庄屋宅。海軍将校宿泊所。「からつや」の道路前、西側付近に亀川温泉の「筋湯」がある。

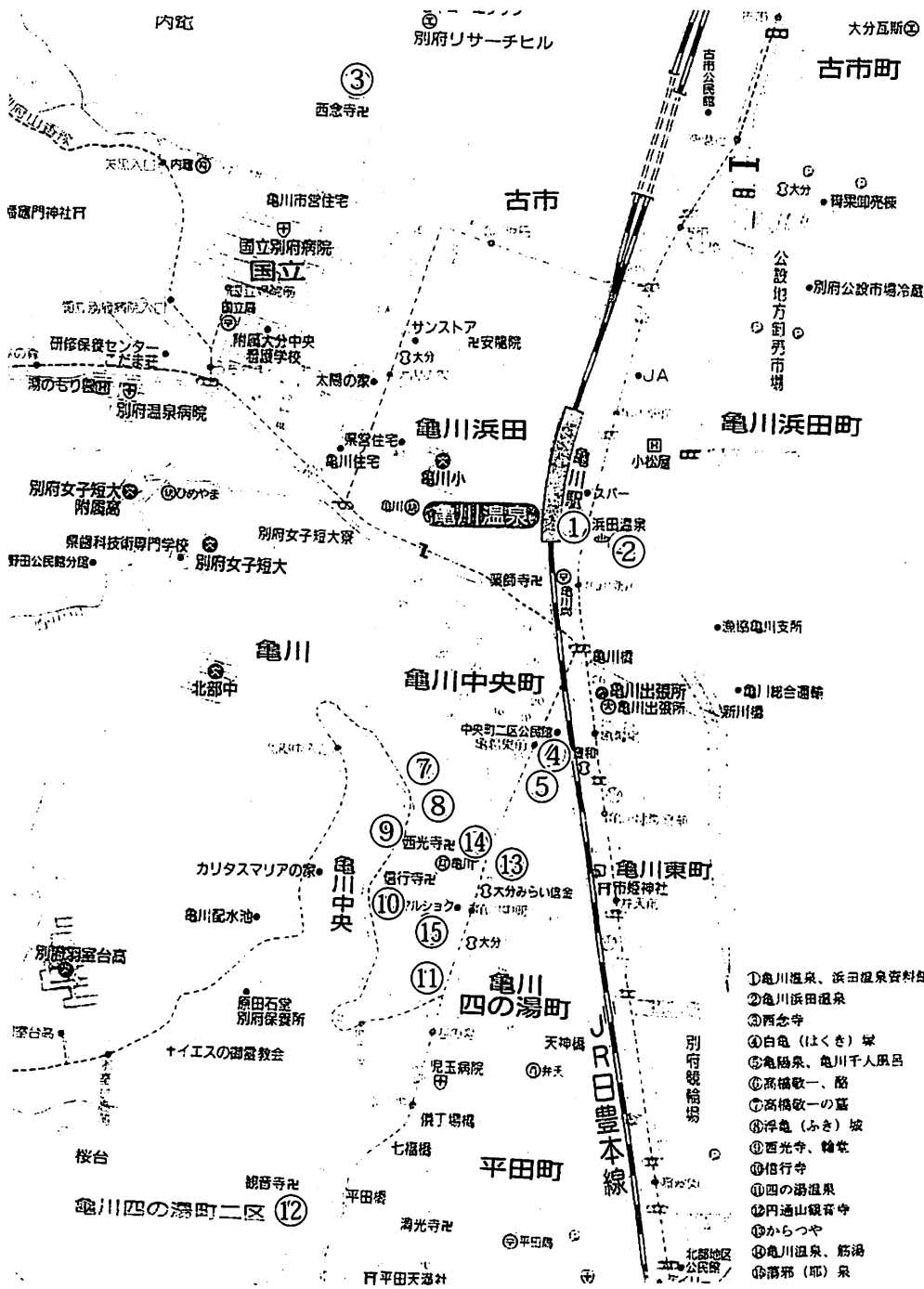
⑭亀川温泉、筋湯 亀川中央町四―一（元御越（おこし）町―亀川町六五六―二）旧国道沿い西側にこの浴場は、大正三年（一九一四年）泉源を亀川町六五三―一に求めて開設された小さな浴場である。古くは、石造りの湯槽が一槽で

男女混浴だった。いまはこれを二槽に区切って男女別としてあるがお湯は通い会っている。お湯は時々白く濁ったり、清く澄んだりするが、「白くににごるのは、薬師様がはいったためである。だからその後ではいると病気がよく治る。」と語られている。今は共同浴場となっており、区民の人々の入浴は無料である。外来者に対してもむづかしい規則はない。心づくしのお賽銭で入浴することができる。入浴時間は、午前六時三〇分から午後二〇時三〇分まで、つまり、経営方法も市内の他の浴場とは違った形で運営されており、昔の姿をそのまま残した珍しい浴場である。なお、この温泉は、神経痛、リユーマチ、その他、諸病に特效があるため、入湯客のたえることがない。

⑮蕩邪(耶)泉(とうやせん) 亀川中央町(元亀川村―亀川町)の旧国道(小倉街道)の西側山すその低地にあった温泉浴場の名前は加来飛霞(かく・ひか)の「高千穂採草記」弘化二年(一八四五年)に出ている。この浴場の創立は古く、江戸時代末の天保一二年(一八四一年)春、亀川村庄屋高橋万之丞が同村にあった年(とし、歳)神社の境内に創設したのが始まりであるといわれている。上記の記録により浴場の命名者が帆足万里(ほあし・ばんり)であるこ

とや、弘化のころ、すでに蕩邪泉が温泉浴場として賑わっていたことがよく分かる。万延元年(一八六〇年)の「亀川村旅人滞在帳」には蕩邪泉に宿屋があったことや亀川温泉場の声価が西日本全域に及んでいたことが分かる。大正期になってからは、次第にさびれ今日では、その址と泉源地址を残すのみである。泉源地(旧小倉街道西側の山脚)には、今なお薬師像と石殿、破損した五輪塔などが残されている。「別府温泉湯治場大事典 安部巖著」より引用。

加来飛霞は、日出の帆足万里門下で本草学を学んだ。天保五年(一八三四年)、日向の高千穂山群へ植物採集調査におもむいた。飛霞が、高千穂に赴く途中に立ち寄った蕩邪泉は、万里が命名した湯である。飛霞が訪れた頃は、ちょうど湯屋を改築したばかりで休憩室まで備わっていた。蕩邪泉の創建については、亀川庄屋の「温古知新録」によれば、蕩邪泉は、天保一一年に歳の神の境内に新湯を引いて建てた。費用は、その年の夏にばくちをした若者たちから取り上げた罰金を基にしたのである。蕩邪が「邪(よこし)まなものを雪(そそぎ)流す」という意味であれば、万里の命名は、真に当をえたものであると言わねばならない。「江戸時代の別府温泉史料集成、入江秀利著」より引用。



- ① 亀川温泉、浜田温泉資料館
- ② 亀川浜田温泉
- ③ 西念寺
- ④ 白亀（はくき）塚
- ⑤ 亀湯泉、亀川千人風呂
- ⑥ 高橋敬一の墓
- ⑦ 高橋敬一の墓
- ⑧ 浮亀（ふき）塚
- ⑨ 西光寺、輪堂
- ⑩ 信行寺
- ⑪ 四の湯温泉
- ⑫ 円通山観音寺
- ⑬ からつや
- ⑭ 亀川温泉、筋湯
- ⑮ 湯那（那）泉